

日本行動分析学会ニューズレター

# J-ABAニューズ



2012年 冬号 No.69 (2013年2月25日発行)

発行 日本行動分析学会 理事長 園山 繁樹  
〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内  
FAX : 06-6910-0090 (日本行動分析学会事務局と明記) URL : <http://www.j-aba.jp/>  
E-mail : [j-aba.office@j-aba.jp](mailto:j-aba.office@j-aba.jp)

---

日本行動分析学会第31回年次大会のご案内 .....平澤 紀子  
研究教育推進委員会から : Winter School for Young Behavior Analysts.....研究教育推進委員会  
行動分析学の発信・普及 (dissemination) .....山本 淳一  
日本学術振興会短期招聘研究プログラムの感想.....Joseph McCleery  
連載 : いま、こんな研究しています (18) .....松田 壮一郎  
応用行動分析に基づいた自閉症の早期療育支援~NPOにおける実践と研究~.....熊 仁美  
日本の応用行動分析躍進の夜明け前.....竹島 浩司  
自著を語る : 『ABA スクールシャドー入門—特別に支援が必要な子どもたちを園や学校でサポートする  
親・セラピストそして先生のために』.....吉野 智富美  
事務局から : 年会費の預金口座自動引落しができます!.....事務局  
編集後記.....ニューズレター編集部

---

## 日本行動分析学会第31回年次大会のご案内

準備委員長 平澤 紀子 (岐阜大学)

皆様のお手元に、日本行動分析学会第31回年次大会1号通信が届いた頃かと思います。つきましては、2013年7月27日(土)、28日(日)岐阜大会に向けての準備状況をご報告させていただきます。

例年、年次大会は、①地域の食や文化に触れながら、②行動分析学の最前線の研究成果を討議し、③会員相互の交流を深め、それが行動分析学のさらなる発展をもたらす機能を

果たしていると思います。本大会でも、その3つを目指して、精一杯準備をさせていただく所存です。何かと至りませんが、どうぞ、よろしくお願いいたします。

まず、①岐阜のご案内です。前日7月26日(金)に名古屋市内で行われる創立三十年記念式典・記念シンポジウムに参加される皆様が多いと思います。岐阜は、名古屋から快速で20分ほど、会場となる岐阜大学はJR岐阜

駅からバスで25分ほどです。記念の会に引き続き、ぜひ、この機会に岐阜にお越しいただければと思います。

さて、岐阜は国盗りの地、戦国のロマンを今も感じさせる金華山と山頂にそびえる岐阜城を背景に、清流長良川で鶺鴒が行われています。鶺鴒匠が鶺鴒を自在にあやつって鮎を狩る様子は、行動分析的にも、魅力を感じていただけたらと思います。大会終了後のオプションツアーをご活用ください。また、歴史好きの方には、齋藤道三・織田信長の岐阜城へ、そして飛騨高山にも足を伸ばしていただくこともできます。食所も含めて、大会HPをご覧ください。

そして、要となる②行動分析学の最前線です。本大会では、岐阜大学との共催で行い、多くの企画が実施できるように準備しております。1号通信でご案内したように、学会企画シンポジウム（健康問題や依存性に関する最前線の話題）、特別講演、大会企画シンポジウム（インクルーシブ教育の構築に向けた行動分析学の貢献や課題）、公開講座（Positive Behavior Support、授業づくりや行動問題へのアプローチ）を予定しています。社会的ニーズの高い課題における行動分析学の寄与が明らかにされるはずです。また、なんとといっても、会員の皆様の研究成果が目玉です。研究発表、

自主シンポジウム、沢山のご応募をお待ちしております。

さらに、③会員相互の交流です。記念の会に後続する大会ですので、懇親会では特別に三十年記念のワイングラスで乾杯をしたいと思います。ホテルでの着席ビュッフェ料理で、会員相互の交流を深めていただく趣向です。そこでの交流は行動分析学の未来につながるはずです。

最後に、確認です。本大会では、諸費用納付手続きをJTBに委託しています。予約参加申込者（4月5日（金）までの申込み者）に、JTBから諸費用の請求書が郵送され、その請求書により納付を行って頂く形式です。1号通信に振込用紙は同封されませんのでご注意ください。発表を行わない方も予約参加をご希望される場合は、必ず期日までに参加申込をお願いします。また、大会初日の7月27日（土）は長良川花火大会が開催されるため、混雑が予想されます。1号通信の宿泊案内をご活用ください。

本大会が、行動分析学のさらなる発展に向けた討議や交流の場となることを願っております。多くの皆様のお越しを心よりお待ちしております。

---

## <研究教育推進委員会から>

# Winter School for Young Behavior Analysts

## 研究教育推進委員会

会員（特に大学院生）の皆様へ

研究教育推進委員会では、現在、大学院に在籍されている院生や研究生を対象に、2日間程度の集中講義による「行動分析学・冬の学校」を企画しております。場所や時期などはまだ未定ですが、参加者、講師が泊まり込みで議論もできるような時間と空間を用意したいと思います。費用について

でも、まだ決まっていませんが、宿泊込みで3万円以内に抑えたいと考えております。

そこで、どのような先生に、どんな授業を行っていただくかの希望を皆さんにお伺いしたいと思います。現在のところ4人の先生（基礎系2名、応用系2名、いずれも基盤的な講義）に、2日間にわたり、1コマずつ、2コマお願いする

予定です。大学院でも、なかなか聞くことのできない先生方や講義内容について自由に挙げていただければ幸いです。候補者の人数や内容はいくら挙げて構いません。それをもとに、先生方と交渉を開始したいと考えております。初めての試み

なので手探り状態ですが、どうかご協力のほど、お願い申し上げます。

投稿先

classbehavioranalysis(at mark)gmail.com

---

## 行動分析学の発信・普及（dissemination）

山本淳一（慶應義塾大学）

### 1. WEBを活用したコンサルテーション（e-Consultation）

行動分析学をヒューマンサービスの現場で活用していただくためには、何が必要なのでしょう？

特別支援教育や発達臨床の研修会や講演会に呼ばれることが多いのですが、1時間30分では基本の基本しか話せません。ですから、依頼された時には、「ワークショップもするので、短くても3時間、できれば6時間を設定して下さい」とお願いします。依頼された方は、たいていここで「困ったな」という反応をされます。「いかがでしょう？」とさらに聞いてみると、「時間枠（日時も！）が決まっている」「同じ人の話だけというわけにはいかない」などの理由をあげられます。「（遠まわしに・・・）受講生を長い時間拘束することはできない」「（直接的に・・・）受講生の集中力が続かない」という理由をあげられる方もいます。それでも、6時間の枠を取っていただいた場合もあり、ご担当の先生方のご努力には頭が下がります。

本年、小児科医の研修会講師をした時、試験問題をつくり、採点するよう依頼されました。行動分析学の発信・普及のためには、何らかの確立操作が必要だと思えます。

現在、私たちの研究室では、三菱財団の補助を受け、ネット上に講義（e-lecture）の動画をあげています。「応用行動分析学概説（入門編）」「応用行動分析学（実践編）」「行動問題解決方法」「離散試行型指導法の実践」「機軸行動指導法の実践」など、それぞれ30分程度のビデオをアップしていま

す。2012年には、依頼された講演や研修の参加者にアカウントを発行し、期間限定で、研修の内容に関する実践事例の検討が視聴できるので、ぜひご活用下さいというアナウンスをしてきました。ただ、見てくださる専門家は、たいへん少なかったです。

一方、大学で朝から晩まで行う専門家研修を受ける方にも、事前、事後の視聴をしてもらっています。1日研修と2日研修があり、「応用行動分析ブートキャンプ（ABABC）」と称しています（近藤ら、2012）。また、非常勤講師として集中講義を行っている大学院でも、事前に視聴してもらっています。視聴率はほぼ100%です。

そこで、本年からは、研修のご依頼があった時に趣旨をお話し、受講する皆さんに、事前にWEBにアクセスして講義を視聴していただくことを前提にお引き受けするようにしています。さっそく、受講生全員が事前に視聴してから参加するとおっしゃってくださったところがあり、今からその効果が楽しみです。

### 2. ビデオを使ったコンサルテーション（Video Consultation）

現在、教育サポートセンター、発達相談センター、発達支援センター、療育施設、病院、NPO法人などのスーパーバイザー、アドバイザーを引き受けていて、個別の事例について定期的に討議をする機会を多く持っています。もちろん、応用行動分析にもとづいた発達支援、教育支援という観点からスーパーバイズするのですが、それを効果的

にするためにはスタッフ（相談員、教員、保育士、保健師、医師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、臨床心理士など）が応用行動分析の知識を使った実践ができることが必要です。大学院の応用行動分析の実習の授業では、学生たちと子どもたちとの関わりをビデオで撮ってそれをもとにフィードバックをしています。それを、実践現場で、専門家と一緒に行うことで、質の高い支援を提供できないかと考えました。

それぞれの職域には、高い専門性があるので、それにプラスして応用行動分析の専門性を付け加えることとなります。そのためには、まず知識を伝達します。スタッフには講義を受けていただき、その後、こちらが用意したビデオを使った演習をします。

ビデオ映像に現れている相互作用を示しながら、スタッフの行動（刺激）と子どもの行動とを解説します。その中で一番重要なのは、行動に焦点を当てることです。ビデオに映った行動の種類をできるだけ多くみつけ、それを言語的に記述すること、それらの行動の中から適切な行動を抽出することなどです。次に、行動に影響を与えている環境の条件、すなわち刺激を見つけて、それを記述してもらいます。ここまで実施すると、相当、応用行動分析の理解が進みますが、その知識を実践するためには、もうひと工夫が必要です。

それぞれの実践現場でのビデオ（スタッフも子どもも映っている）を撮ってきていただき、それをスタッフ全員で見ながら、支援方法、行動問題の解決方法を検討するということです。ビデオを使ったコンサルテーションです。その際に、いきなり、ABC分析をしてもらうことはしません。まず、自分のことばで、ビデオの状況を叙述してもらいます。それから、言語行動のシェイピングと流暢性訓練を進めます。形だけでABC分析ができて、実践ではまず使ってもらえません。

ともかく、自分の担当している子どもたちが登場するので、リアリティと切迫感が、全く違います。また、支援効果と問題解決もがぜん向上します。

スタッフの学習過程を考えてみます。繰り返し見る事で、行動と刺激に「注意」が向く。問題行動も含めて、子どもたちはいろいろな行動をしていることがわかる。視覚の手がかりがあるので、増やしたい行動と減らしたい行動を弁別しやすくなる。一時停止を押しながら行動と刺激を静止画として見ながら解説することで、関わる本人やスタッフの行動が刺激となって、子どもに影響を与えていること、すなわち行動随伴性（機能）が明確になる。

東京以外のスタッフとは、主に、Skypeを使って定期的な会議を行っています（Koremura, et al., 2012; 田中ら, 2012; 森下ら, 2012）。

ビデオコンサルテーションは、特にコミュニケーション支援に威力を発揮します。日常生活スキルなどターゲット行動がはっきりしている場合には、データだけで十分かもしれません。ただ、コミュニケーション行動は多様性が高いので、その子の持っている行動レパートリーを、映像を通して把握したいのです。同時に、スタッフの行動レパートリーの把握もどうしても必要です。

「応用行動分析が実践できる保育士」「応用行動分析を使いこなせる言語聴覚士」「応用行動分析を地域の学校で用いる制度設計をする特別支援教育課課長」などが養成されるわけです。もちろん、このビデオ・コンサルテーション・システムを運用するためには、機関と責任者の承認（承認までに6カ月以上かかったこともあります）、個人情報管理、保護者や関係者の承諾などクリアすべき課題とプロセスがあります。

現在、これらを研究として進めています。まずは、スタッフが応用行動分析の技法を活用できるようになったかを、ビデオコンサルテーション以前と以降で比較しています。技法適用度（fidelity: フィデリティ）の評価です。現在つくっているのは50項目のもので、それらの項目を2者以上で独立に評価します（Matsuzaki & Yamamoto, 2013）。同時に子どもの行動も、標準検査、実際の行動を指標に計測します。

コンサルテーションというと、困ったことに対

する相談ということが多いのですが、プロアクティブな支援に向けた、機能的なスーパーバイズ・システムをつくることができると思っています。「行動分析学」という実体をそのまま伝達するのではなく、「行動分析学をヒューマンサービスの現場で活用する行動」を増やしていくことが、発信・普及の本質であると考えています。

#### 付記

本論考中の研究は、「三菱財団」からの研究補助（「発達支援の専門性向上のための映像データベースの構築と通信コンサルテーション」）を得て進めています。

#### 引用文献

近藤鮎子・石川菜津美・是村由佳・山本淳一. (2012). 短期集中型スタッフトレーニング：機軸行動支援法 (Pivotal Response Teaching) の習得. 日本行動分析学会第30回年次大会発表論文集. 高知城ホール, 高知.  
森下浩充・近藤鮎子・是村由佳・山本淳一. (2012).

自閉症児に対する離散試行指導法 (DTT) 機軸行動指導法 (PRT) を用いた言語聴覚療法. 日本行動分析学会第30回年次大会発表論文集. 高知城ホール, 高知.

田中清章・永富大輔・是村由佳・山本淳一. (2012). 特別支援学校生徒の集団活動参加への積極的行動支援 昼休み「友達の輪」プログラム. 日本行動分析学会第30回年次大会発表論文集. 高知城ホール, 高知.

Koremura, Y., Kondo, A., Morishita, H., & Yamamoto, J. (2012, May). E-Consultation for a speech therapist: An exploratory study. Poster presented at the 38th annual convention of Association for Behavior Analysis, Seattle, WA.

Matsuzaki, A. and Yamamoto, J. (2013, January). Effects of Train-the-Trainer Program: Early intervention for children with autism spectrum disorders Poster presented at the 7th Annual Autism Conference, Portland, OR.

---

## 日本学術振興会短期招聘研究プログラムの感想

Joseph McCleery, Ph.D. (英国バーミンガム大学)

I am currently a Lecturer in Developmental Neuroscience in the School of Psychology at the University of Birmingham, England. The focus of my research program is to understand early brain and behavioural development in children with autism. My laboratory is particularly focused on experimental studies aimed at furthering understanding of factors affecting early social-communicative, social-emotional, and language functioning and development in this population. To this end, my students

and I utilise electroencephalography (EEG), eye-tracking technology, and standardised and non-standardised clinical and behavioural assessments to assess young children diagnosed with autism, as well as infants and toddlers who are at risk for developing autism. We have recently also begun examining brain and behavioural change associated with an evidence-based naturalistic behavioural intervention programme, Reciprocal Imitation Training (RIT), in young children diagnosed with

autism.

I was invited to visit the Laboratory of Professor Junichi Yamamoto, at Keio University, in 2012, with funding support from the Japanese Society for the Promotion of Science. Having met Professor Yamamoto during his year-long sabbatical in the Autism Research Laboratory of Professor Laura Schreibman, University of California in 2008, and also having made a short visit to his Keio University laboratory in 2010, I was very excited to have this opportunity to have an extended visit to Tokyo to get to know the members of the laboratory, as well as other Japanese researchers.

During my month-long visit to Keio University, which occurred during December, 2012, I engaged in a number of research and clinical activities. These included workshops and discussions on developmental brain imaging research (e.g., functional near-infrared spectroscopy), as well as early behavioural intervention research (e.g., the Picture Exchange Communication System, Pivotal Response Training). I also engaged in a number of clinical observations and discussions on the direct translation of evidence-based practice into applied settings (e.g., hospitals), and on the in vivo integration of technologies (e.g., computer-based match-to-sample) into early behavioural intervention contexts. Along with this, I spent significant time with graduate students, discussing current and future challenges for autism intervention research and practice, reading and providing feedback on manuscripts they were each preparing for submission for publication in international journals, and developing research plans and ideas. Finally, I visited

hospitals and research centers, including Dokkyo Medical University and the National Center for Neurology and Psychiatry, to participate in symposia and to discuss international research and collaboration.

I consider my visit to Professor Yamamoto's laboratory to have been a major success. I was particularly impressed with the breadth and depth of the applied behaviour analytic intervention research being conducted by the graduate students in the laboratory, which spanned from computer-based second language training, to parent-training of play-based behavioural strategies, to computer-based training of word comprehension using match-to-sample. I was also highly impressed with some of the more exploratory work involving the direct integration of multiple intervention methods. For example, several laboratory members were very effectively incorporating computer-based match-to-sample training of emotional expressions into play-based behavioural intervention sessions, as part of the Face Expression Expert Program. Similarly, students were effectively incorporating discrete trial training into play-based behavioural interventions sessions, via child choice to engage with highly motivating books and other activities on a tabletop. Finally, I was impressed with the incorporation of research technologies, including functional Near-Infrared Spectroscopy (fNIRS) and Eye-Tracking, to measure and understand the details and mechanisms of the social, emotional, and behavioural changes that result from these and other behavioural intervention approaches.

I am very grateful to both Professor

Yamamoto and the Japanese Society for the Promotion of Science for this opportunity to visit Tokyo and learn about applied behaviour analysis and other research and clinical activity in Japan. I was impressed with the level, nature, and quality of this work, which shows clearly to me that innovative and exciting developments in applied behaviour analysis and other autism research and practices will continue to come

from both the east and the west. I hope and believe that the visit and activities in which I participated are part of a larger effort for Japanese, British, and Americans working on research and practice in this area will continue and expand our work together so that we can better understand, treat, and support of individuals with autism now and in the future.

---

私は現在イギリスにあるバーミンガム大学心理学部の、発達神経科学課程で専任講師をしています。自閉症児の発達早期における、脳と行動の発達理解に研究の焦点を当てています。私のラボでは特に、発達早期における自閉症児の、社会的コミュニケーション・社会的感情・言語機能とその発達、へ影響を及ぼす要因について、より理解を深めることを目的とした実験研究を進めています。私たちは、自閉症と診断された幼児、及び自閉症リスクのある乳幼児を対象に、脳波(EEG)やアイトラッキング技術を用いた研究や、標準化された/されていない臨床・行動アセスメントを行っています。また最近では、自閉症と診断された幼児へエビデンスに基づく自然場面での行動介入プログラム、**Reciprocal Imitation Training (RIT)**を実施し、それに関連した脳と行動の変容についての研究もスタートさせました。

2012年、私は日本学術振興会のサポートを受け、慶應義塾大学の山本淳一教授のラボに招聘されました。2008年、カリフォルニア大学サンディエゴ校にあるローラ・シュライブマン博士の自閉症研究ラボで当時1年間のサバティカルを過ごしていた山本教授に私は出会い、2010年には、慶應大学へ招待講演を含む短期訪問もしました。なので、今回東京に長く滞在し、ラボメンバーや、日本の他の研究者と知り合える機会を得たことに、大変興奮しました。

1か月(2012年12月)の間、慶應大学で私は数々の研究や臨床に携わりました。その中で、発達脳画像研究(例えば機能的近赤外分光法; **fNIRS**)や早期行動介入研究(例えば **PECS** や機軸行動支援法;**PRT**)などについてのワークショップやディスカッションをしました。また、病院などの応用場面へエビデンスに基づく実践をどのように直接適用していくか、早期行動介入の文脈でコンピュータを用いた見本合わせなどのテクノロジーと人が行う訓練をどのように統合するか、などについて、数々の臨床観察やディスカッションも行いました。それに伴い、大学院生とは非常に長い時間を過ごしました。自閉症への介入研究や実践における現在と未来の解決すべき課題について話し合ったり、彼らが国際学術誌へ投稿しようと準備している原稿をそれぞれ読んでフィードバックをしたり、研究プランやアイデアを練ったりしました。更には、獨協医科大学や国立精神・神経医療研究センターなどの病院・研究施設を訪れてシンポジウムに参加し、国際的な研究とコラボレーションについてディスカッションをしました。

私は山本教授の研究室への訪問は大成功だったと思います。特に、コンピュータによる外国語学習研究から、遊び場面の訓練計画についての親支援、コンピュータによる単語の見本合わせ訓練に及ぶ、ラボの大学院生による応用行動分析学を用いた介入研究の幅の広さと深さに感

銘を受けました。それらに加えて私が非常に感銘を受けたのは、複数の介入方法を直接統合した、より探索的な研究についてです。例えば、ある大学院生は、コンピュータを用いた表情の見本合わせを Face Expression Expert Program の一部として、遊び場面の行動介入セッションへ、非常に効果的に取り入れていました。同様にある学生は、机上にある動機づけの高い本や他の活動への子どもの選択を用いて離散試行型指導法(DTT)を遊び場面での行動介入セッションへ、効果的に取り入れていました。その他にも、これまでに挙げたような行動的介入アプローチの結果である、社会的・感情的・行動的な変容を評価する為に、近赤外線分光法(fNIRS)やアイトラッキングといった研究テクノロジーを取り入れていることにも感銘を受けました。

東京を訪れ、日本で応用行動分析学や自閉症

研究、臨床実践について学ぶ機会を与えてくれた山本教授と日本学術振興会に本当に感謝しています。私は一連の研究活動のレベル・特徴・質が高いことに感銘を受け、それらが東洋と西洋の両方から、応用行動分析学・自閉症研究と実践にとって革新的かつ刺激的な発展を遂げていくことを確信しました。今回訪問した中での私の活動が、日本・英国・アメリカにおけるこの領域での研究と実践について、大きな成果の一部となり、そして私たちが自閉症のある人々へより良い理解・介入・サポートができるように、現在もこれからも、共に働き、続けたいことを、心より願い、そうできると信じています。

ジョセフ・マクリーリー, Ph. D

(日本語訳：是村 由佳、松田 壮一郎)

---

<いま、こんな研究しています(18)>

## 自閉症スペクトラム障害児における顔・表情の刺激機能

松田 壮一郎 (慶應義塾大学社会学研究科心理学専攻)

自閉症スペクトラム障害の子どもたちと日々関わっていると、言語・模倣・自己-他者マッピング・音韻知覚・視聴覚統合などの様々な「心理学的機能」について、日々刺激的な発見があります。目の当たりにした「経験的事象」から帰納的に研究仮説を立て、検証していくことほど、知的的好奇心を刺激するものではなく、子どもが様々な行動を獲得していく様子を見ることほど、感動するものではありません。そのような、日々の「研究行動」が形成される契機となったのは、現在行っている、「自閉症スペクトラム障害児における顔・表情の刺激機能」に関する一連の研究です。

現在、米国では88人に1人の子どもが、自閉

症スペクトラム障害と診断を受けています

(Baio, 2012)。自閉症スペクトラム障害児が初めて診断を受ける年齢は平均4歳ですが、早期発達支援の効果は2歳からあると報告されています(Dawson, et al., 2010)。そのため、早期発見と早期支援が喫緊の課題です。自閉症重症度を測定するために用いられるAOSI(Bryson, et al., 2008)、ADI-R(Lord, et al., 2001)、ADOS(Lord, et al., 2000)では多くの項目が「顔・表情」に関連しており、自閉症スペクトラム障害児の早期発見・早期支援の文脈においても「顔・表情」が大いに注目されています。しかし、「顔・表情」に対する反応を評価・支援するためには、言語・模倣・自己-他者マッ



ピング・視聴覚統合などの様々な「心理学的機能」を含めて包括的な分析を行うことが必要です。そこで、山本淳一研究室で包括的な顔・表情支援プログラム「FEEP; Face Expression Expert Program」<sup>注1</sup>を共同開発しました。

FEEPには2つの評価・支援方法があります(図)。1つはFEEP-CBI(Computer Based Intervention)、もう1つはFEEP-NI(Naturalistic Intervention)です。FEEP-CBIでは①表情(静止画・動画)、②感情語(音声)、③感情プロソディ(音声)、④感情的動作(動画)、⑤社会的文脈(動画)5つの刺激要素について評価・支援します。刺激間関係の成立/不成立を、MTS(Matching to Sample)手続きにより評価し、未成立の刺激間関係についてはMTS訓練を行います。FEEP-CBIはVisual Basicで作成されたソフトウェアで、刺激の提示・反応の記録を全て自動的に行います。また、タッチパネルを用いることで、年齢の低い子どもでも、容易に反応することが可能です。

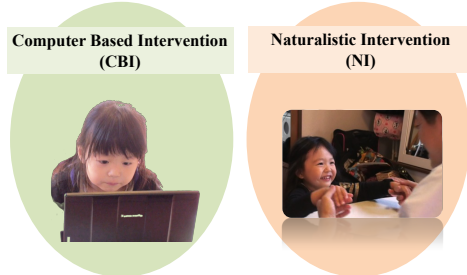


図. FEEP (Face Expression Expert Program) における2つの評価・支援方法

FEEP-NIでは、①顔・表情への注意、②表情模倣・表情表出、③共同注意などの項目についての発達を、遊び場面を通して評価・支援します。現在、2つの評価・支援方法を組み合わせることで、幅広い生活・発達年齢の子どもを対象として、「顔・表情の刺激機能」についての包括的な評価・支援ができるようになりました(松田・山本, 2010, 2011, 2012; Matsuda & Yamamoto, 2011, 2012a, 2012b, 2012 c; 松田・菅佐原・山本, 2010)<sup>注2</sup>。

また、「顔・表情」に対する眼球運動や脳活

動の計測を行い、知覚・神経基盤の可塑性についての検討も同時に進めています。表情静止画や動画を提示し、視線追跡装置(TOBI)を用いた眼球運動の測定や、近赤外線分光法(NIRS)を用いた脳活動の計測も進めています。これらの研究を通して、自閉症スペクトラム障害児と定型発達児の間でどのような視線パターン・脳活動の違いがあるか、検討しています。このような、知覚・神経基盤についての研究を進めていくことで、自閉症スペクトラム障害児の早期スクリーニングに貢献することを目指しています。更に、これらの評価を訓練前・訓練後に実施することにより、視線や脳活動が訓練によってどのように変化するかについても、現在研究を進めています。

今後はFEEPからソーシャルスキルズ・トレーニングへの展開や、表情の後続刺激としての機能性、身体接触とアイコンタクトの関係性、などについても、研究していきたいと考えています。そして、子どもたちと直接関わる中で得られた「経験的事象」を「研究データ」へと昇華させていく営みを続けながら自閉症スペクトラム障害児支援に携わる、という「とてつもなく楽しい研究行動」を、これからも続けていきたいと思っています。

注1: FEEPの詳細は、下記HPをご覧ください。

<http://www.flet.keio.ac.jp/~yamamotj/feep/index.html>

注2: FEEP関連の文献に関しては、以下のHPをご覧ください。

(山本淳一先生HP)

<http://www.flet.keio.ac.jp/~yamamotj/>

(松田壮一郎HP)

<https://sites.google.com/site/devpsysmatsuda/>

引用文献

Baio, J. (2012). Prevalence of autism spectrum disorders: autism and developmental disabilities monitoring

- network, 14 sites, united states, 2008.  
Centers for Disease Control and  
Prevention Surveillance Summaries, 61,  
1-19.
- Bryson, S. E., Zwaigenbaum, L., McDermott,  
C., Rombough, V., & Brian, J. (2008).  
The autism observation scale for  
infants: scale development and  
reliability data. *Journal of Autism and  
Developmental Disorders*, 38, 731-738.
- Dawson, G., Rogers, S., Munson, J., Smith,  
M., Winter, J., Greenson, J.,...Varley, J.  
(2010). Randomized, controlled trial of  
an intervention for toddlers with  
autism: the early start Denver model.  
*Pediatrics*, 125, 17-23.
- Lord, C., Risi, S., Lambrecht, L., Cook, E. H.,  
Leventhal, B. L., DiLavore, P. C.,...  
Rutter, M. (2000). The autism diagnostic  
observation schedule-generic : a  
standard measure of social and  
communication deficits associated with  
the spectrum of autism. *Journal of  
Autism and Developmental Disorders*,  
30, 205-223.
- Lord, C., Rutter, M., Le Couteur, A. (1994).  
Autism diagnostic interview-revised: A  
revised version of a diagnostic interview  
for caregivers of individuals with  
possible pervasive developmental  
disorders. *Journal of Autism and  
Developmental Disorders*, 24, 659-685.

---

## 応用行動分析に基づいた自閉症の早期療育支援 ～NPOにおける実践と研究～

熊 仁美

(慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程/NPO 法人 ADDS 共同代表)

### はじめに

大学生の時に、自閉症のお子さんの早期療育の現場に関わり始めてから、もうすぐ10年。お子さんの行動が目の前で変わっていく感動を、ご家族と分かち合えるこの仕事に魅せられ、いつの間にか、こんなに月日が経ってしまいました。

私は現在、大学での研究活動と並行し、NPO 法人 ADDS として、「子供たちの可能性を見逃さない社会」を目指し、自閉症のお子さんへの応用行動分析に基づいた家庭療育支援を行っています。本稿では、その活動について、皆様にご紹介させていただきます。

これまで、主に海外の研究を通じ、応用行動

分析に基づいた早期集中療育の効果が示されてきました。しかし、我が国では、自閉症の特性や応用行動分析に精通した専門家を週何十時間も確保し、療育を実施することに、人材や経済的支援の不足等、多くの問題があります。そこで私達は、「学びの支援の場」というスタンスで、お子さんの周囲の方々に支援者になって頂くことで、それらの問題を低減し、かつ効果のある療育をお子さんに提供する仕組み作りを目指しています。

### NPO 法人 ADDS の活動内容

1 番重視している「家庭療育スタートアッププログラム」は、家庭療育に焦点を絞った1年間のペアレントトレーニングで、月1回の全体

研修と週1回の個別指導を並行して実施します。全体研修では、親御さんが家庭療育を主導する為に必要な応用行動分析の知識講習、行動問題分析や課題分析ワーク等を行います。



**保護者向け全体研修の様子**

個別指導では、スタッフがお子さんの発達に合わせて個別に課題を構成し、記録用紙にまとめてお渡しします。親御さんは、記録用紙に基づいて、家庭で療育の実践と記録を行い、次の個別指導で進捗をスタッフに報告、という流れを毎週繰り返します。アンケートでは、「問題への対応策や、子どもに合った課題を組み立てられるようになった」「小さな成長を喜べるようになった」等の声を頂いており、やり甲斐を感じています。



**個別指導の様子**

その他、「学生セラピスト養成・紹介事業」等があります。ADDSには、所属する学生達で運営するADDS学生セラピスト部という組織があり、現在30人程の学生が活動しております。彼らは、40時間の研修を受けた後、学生セラピストとしてご家庭を訪問します。その傍ら、研修、事例検討会、読書会やご家族向けイベント等を定期的で開催し、療育スキルや知識の向上を目指し、勉強をしています。学生たちのエネルギーは本当に素晴らしく、私も負けてられないな、と日々感じさせられます。卒業後、教

育現場に出ていくメンバーも多いので、彼らが今後、それぞれの現場で出会う子ども達にとって、素晴らしい存在になってくれることを期待しています。



**学生セラピスト部の読書会**

#### 実践と研究の循環を目指して

応用行動分析を学び、研究発表する中で叩き込まれた「データが全て」という考え方は、NPOとして活動する上でも、重要な指針となっています。私達は、療育の効果を客観的な指標で示していくことを重視し、日々の指導の記録と同時に、半年に1回発達検査を行い、指導の評価を行っています。最近では、療育に取り組む親御さんの子育てストレスに関するデータなども蓄積し始めました。臨床と研究を緊密に連携し、産学の循環が出来るモデルを作りたいという思いがあり、今後、研究発表をする準備を進めています。

#### 最後に

寄稿のお話を頂き、8年ほど前、団体設立について、指導教授である山本淳一先生にご相談に伺った時のことを思い出しました。先生が、心から応援して下さい、「もっと勉強なさい」と療育に関する様々な英語のテキストを下されたことは、今でも大切な思い出です。これまで、山本先生をはじめ、様々な先生方や、学生さん、親御さん、そしてお子さんとの出会いに恵まれ、ご指導とご協力を頂いてきましたこと、この場をお借りして改めて感謝を申し上げたいと思います。

今後も勉強を重ねながら、自閉症のお子さんやご家族のニーズを真摯に受け止め、活動した

いと考えております。共感して下さる方がいらっしやいましたら、大変嬉しいです。何かありましたら、ADDSのHPまで遊びにいらっしや

って下さい。どうぞよろしくお願い致します。  
ADDS ホームページ (<http://www.adds.or.jp/>)

---

## 日本の応用行動分析躍進の夜明け前

竹島 浩司（なごや自閉症治療教育相談室）

私が渡米した2000年の頃は、行動分析はあまり社会的認知度の大きくない、比較的小さな学問の一派でした。私のいたウェスタンミシガン大学の大学院では、卒業後の就職を有利にするために、生徒は臨床心理の免許を取得しようとしていたのを記憶しています。行動分析一本では食べて行けないと考えられていたのでしょう。

2002年に行動分析の認定資格(BCBA: Board Certified Behavior Analyst)を私が取得したときも、生徒間では「今は(資格を取って)何の役にも立たないけれど、将来何があるかわからないから取りあえず取っとけ。」という程度の認識だったと思います。それがどうでしょう？全米の色々な州で、医療健康保険を使って(自閉症の治療教育が主であるが)行動分析のサービスが得られるようになったのです。BCBAは、今では行動分析専門の大学に入っていない人までが、将来就職のためにぜひとも取っておきたいような資格になってきたのです。事実私の所にも全米各地から毎週就職勧誘のメールが届きます。行動分析の認定資格を取るための大学のコースも、もちろん行動分析学会の参加者も急増しています。アメリカに置ける行動分析学の社会的認知度と影響力は飛躍し、これはブレイクと言っても良いと思います。アメリカの子供に結果を残せている実績、研究雑誌に報告されている結果からも、素晴らしい学問である事は確かなので、その力がやっと一般にも認められてきたという事でしょう。

外国から伝えられる技術に、やや慎重気味に

対応することもある日本ですが、日本での行動分析の歴史を見る限り、簡単にアメリカからやってきた学問とも言えないでしょう。元々日本の行動分析学会はその参加者の数や研究レベル、活動の層がアメリカに次いで厚く、歴史もあります。研究雑誌には日本語・英語を含め、多くの日本の研究者が重要な科学研究を発表されてきた事は、皆様ご存知だと思います。日本の大学で行動分析を勉強して、アメリカに短期・長期で留学される生徒も、語学では戸惑う事がありながらも発言の内容ではアメリカの大学院生や教授をうならせることがあります。行動分析は、日本でも成長してきた歴史があるのです。この歴史を考慮すれば、アメリカのように、もし日本で行動分析がブレイクしたとしても、それを支える土台はもうできていると考えても良いのではないのでしょうか。

アメリカでは行動分析認定協会(Behavior Analysis Certification Board)が認定制度を設立したことを発端として、行動分析の認知が飛躍したと考えられています。この認定制度の礎を築かれた前協会長、故 Gerald Shook 博士は、海外にも認定制度を紹介する事に意欲的で、現在世界の色々な国でアメリカの認定制度が取り入れられているのは、博士の積極的な働きかけが背景となっています。日本では、まだアメリカでも一般社会への認知の低かった2002年にいち早く、実践家の職能を分析、定義したタスクリストの全訳が掲載される形で、この認定制度が紹介されました(島宗・中島・井上・遠藤・

井澤・奥田・北川・佐藤・清水・霜田・高畑・田島・土屋・野呂・服巻・武藤・山岸・米山, 2002)。

最近では、昨年シアトルでのアメリカ行動分析学会を機に(ピアシングに参加された方はご存知かと思いますが)、現在認定協会の長である James Carr 博士と、日本の行動分析の発展に深く貢献された山本淳一先生や杉山尚子先生を含め、ミーティングが行われました。(ちなみに前協会長の Shook 博士は日本での認定資格導入に向けても積極的で、杉山尚子先生にも過去に何度かアプローチをされていたそうです。)協会によると、日本の行動分析に貢献されてきた大学の先生は、試験に通れば BCBA を取得できるようです。ということは、日本のようにすでに行動分析に貢献されている教授がいる場合、その教授が BCBA になっていただければ、日本の中で生徒を BCBA に育てることも十分可能であるということです。

行動分析のサービスの質を決める規定に加え、日本で行動分析がブレイクするには、需要側(サービスを受ける側)が行動分析を求める声を出していくことが必要になります。自閉症の治療教育に限らず、日本にも行動分析の改善できる問題は山ほどあり、需要は多いと言えます。しかし、問題を解決する供給側として行動分析はまだ一般に知られていない。これには行動分析家がサービスを提供し、サービスを受けた人を満足させる業績を積み上げて、徐々にその口評判を広げる他にありません。東京や関西ではすでに、自閉症の治療に応用行動分析を使う会社が何社も設立されて、さらにはその中でサービスの基準を定めていこうとする動きもあることも小耳に挟みます。とても良い方向に流れていると思います。私はこれまで認定行動分析士(BCBA-D:認定行動分析士-博士号)として10年以上アメリカの Non-Public Agency や学校区などで勤務してきました。ここで、日本でも増えつつある実践家としての立場から、行動分析の認知度向上に少しでも貢献出来ればと、2013年に「なごや自閉症治療教育相談室(な自

相)」を起業しました。アメリカで行動分析を通して知り合った私の友人も、関東に拠点を置く是村由佳さんや山本華奈子さん、カナダから北海道へ移動された田中桜子さんなど、少なからず日本に帰国し始めて徐々に活動の拠点を日本に変えつつあります。ちなみに私の起業した「な自相」では、家庭訪問の療育だけでなく、「ひまわり教室」として親子で毎日通える形の療育の場所を設けました。またウェブ(www.kojitakeshima.com)やブログ(www.nagoyaaautism.blogspot.jp)を通してABAの療育を紹介し、家庭ですぐに使えるABA療育の情報も提供しています。ABAのサービスの形態は一つではないのです。一般の方に、色々な形での行動分析の応用方法を知って、使ってもらって、素晴らしさを共有して頂きたい。

アメリカ認定制度の導入の可能性、ABAを使った療育を行う会社、日本独自の基準を定めようとする動きなど、今の段階ではどれも小さく、今後大きく育って行くかまではわかりません。「小さな芽」の状態と呼んで良いでしょう。「芽」の段階で善し悪し判断をするのではなく、協力してそれぞれ一つ一つをどれも大切に育てて行けば、日本の風土に合わないものは自然に淘汰され、本当になじむものだけが将来「大木」に育っていくのではないのでしょうか。私には、日本でも行動分析がブレイクする準備が進みつつあると思えてなりません。日本でも行動分析を求める声が国会にまで届き、「臨床心理士」の免許ではなく行動分析の資格が欲しいと、行動分析系の大学に生徒が集まるような時も遠くないのではないのでしょうか。

#### 引用文献

島宗理・中島定彦・井上雅彦・遠藤清香・井澤信三・奥田健次・北川公路・佐藤隆弘・清水裕文・霜田浩信・高畑庄蔵・田島裕之・土屋立・野呂文行・服巻繁・武藤崇・山岸直基・米山直樹(2002). 行動分析にもとづいた臨床サービスの専門性: 行動分析士認

## <自著を語る>

# 「ABA スクールシャドー入門—特別に支援が必要な子どもたちを園や学校でサポートする親・セラピストそして先生のために」

吉野 智富美

(ABA サービス&コンサルティング: ABASaC)

2012年2月に慶應義塾大学の山本淳一先生に監修をして頂き、「ABA スクールシャドー入門—特別に支援が必要な子どもたちを園や学校でサポートする親・セラピストそして先生のために(学苑社)」を上梓致しました。

本書は、発達障がい児への行動介入の中でも「スクールシャドー」という実践について、応用行動分析学の理論と方法を頼りにまとめたものです。

この本において筆者は「スクールシャドー」を次のように定義しました。ABAの知識と技術をもった保護者や行動セラピスト、ボランティアなどが、特別に支援を必要とする子どもが通う園や学校の教室やその他の学習場面に入り、その子どもが社会生活を送るのに必要となるスキルをその場で引き出し、伸ばし、その行動を定着させていく積極的な行動支援のことであると。

本書の特徴は以下の3点にまとめることができると思います。

第1点は、2007年からスタートした特別支援教育を具体的に効果的に推進していくためのアイデアを「スクールシャドーによる実践」として提案している点にあります。園や学校といったソーシャルな環境の中で、特別に支援の必要な子どもの自立をどう促すか、困った行動を減らし、より適切な行動を獲得していくために、

先生はじめ周囲の大人やクラスメイトは自らの行動をどう調整したらいいのか、先生やクラスメイトのかかわりをよりよいものとするために、私たち(応用行動分析学を学んでいる私たち)は何ができるのか、という相互作用を実現するためのアイデアを提案しました。特に第4章、第5章では、教室場面でのアセスメントの方法から機能分析、そして介入計画の立案と行動変容のための実践までを、よく出会う事例を中心にイラストとともに具体的に提案しました。ここから、特別に支援を必要とする子どもたちを支えるために私たちが何をしたらよいかを学び実践できるのではないかと思います。

第2には、第1の特徴の背景となる応用行動分析学の概論、とくに人の行動の理解と予測の仕方について簡潔にまとめている点にあります。それによって、応用行動分析学の専門家が実践する際の参考書としてのみならず、応用行動分析学や特別支援教育を学ぼうとする学生や保護者、療育者のサブテキストとしても本書を活用することができるのではないかと思います。

第3の特徴は、「今すぐにスクールシャドーを実現するために何をしたらよいか?」「学校や先生とどのように連携したらよいか?」という保護者や療育者からの疑問に答えている点にあります。園や学校の事前見学や園長・学校長、担任の先生との定期的な面談方法、教室内

での行動観察のためのスケジュール調整やサポート要請の方法、クラスメイトへの説明など、スクールシャドーを効果的に進めていくために欠かせない実務面のアジェンダを複数取り上げています。これによって、困っている子どもを目の前にして、「やることは分かっている。でも、それをどう実現するか？」と手をこまねいている状況から、応用行動分析学の知識を活用して特別支援教育を実現していくための第1歩を踏み出すことができるのではないかと思います。

筆者は、発達に遅れや偏りがあると指摘され、日常生活に困難を抱えているごく幼い子どもとその保護者への応用行動分析学による支援を行ってきました。はじめのうちは、家庭や来談施設での支援がその中心で、それによって子どもたちと保護者はことばを中心としたコミュニケーションの仕方や生活に必要な行動を学習し、保護者にも子育てをしていく力が芽生えてきたところでした。ところが事はそう簡単には運びません。半年から数年が経ち、彼らが園や学校へと通い始めた頃、再び大きな壁に行く手を阻まれてしまうのです。家庭で機能していた様々なことばや適切な行動が学校では十分に機能しない、少しの手助けと社会的な注目で行動できていたのに、逆にその手助けが多すぎたり賞賛が少なすぎたり、先生に注意されてばかり。そういった状況によって、子どもたちも周囲の大人も再び困難な世界へと入ってってしまうの

です。彼らに対して、家庭と同じく園や学校場面でもサポートができないか、社会生活の中で彼らの自立を促すことはできないか、先生方やクラスメイトを勇気づけ一緒に歩むことはできないか、そのために何ができるのか、という課題とそれを克服する実践の積み重ねから本書ができあがりました。

現在も筆者は保護者や先生方と連携しながら子どもたちの支援を行っています。本書に出てくる成功例ばかりではなく、ときにはミーティングを重ねても先生と平行線を辿るばかりか、「問題があっても見守るだけで十分」「花丸印より×印の方がやる気が出て効果的」と主張する先生方と向かい合うこともあります。先生や筆者自身の力量を疑って個人攻撃したくなる衝動を抑えつつ、有効な打開策を模索しています。

本書の帯に「先生もクラスメイトもみんなが支援者に」というメッセージを編集者が書き添えて下さいました。理想的でなかなか達成も難しいメッセージです。教育系大学の一般教養に応用行動分析学を学ぶ講座があればいいのに。もうすぐ出産を迎える母親・父親学級にも同じく応用行動分析学の講座が設けられたら、私たちの仕事はいずれ必要なくなるのではないかと。そう願って、目標を高く掲げながら、目の前にある小さなステップをこつこつと踏んでいきたいと思います。

---

## <事務局から>

# 年会費の預金口座自動引落しができます！

## 事務局

春寒の候、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。また、平素は学会運営にご協力を頂き、誠にありがとうございます。

さて、先日皆様にご案内をさせて頂きました通り、2013年度の年会費からこれまでの振込納付から預金口座自動引落としによる納付を勧めさせて頂いております。

2013年度の預金口座自動引落しの手続きは終了いたしました。今後、手続きがお済でない方へ、随時ご案内をさせていただきますので、便利な預金口座自動引落しの手続きをお願い申し上げます。今年度から学会に入会された方にはすでにお伝えしておりますが、来年度会費から、口座振替制度が始まります。口座振替にいたし

ますと、①郵便局等へ出向いてのお振り込みの手間が省けます、②お振り込み忘れをしなくて済みます。近々、事務局より、これに関する郵便がお手元に届きます。みなさま、ぜひ、口座振替制度をご利用くださいますようお願い申し上げます。

---

### 編集後記

ご寄稿頂いた皆様、大変ありがとうございました。初めての編集を担当させていただきました。編集の過程で諸先生には大変ご迷惑をおかけしました。また、大変お世話になりました。ありがとうございました。今号の「カラー」は、両極を「海外と日本」、「研究と実践」とした二つの軸の拡張による行動分析学の普及でした。

また、本号では、岐阜での第31回年次大会と、Winter school for young behavior analystsのご案内がありますので皆様ふるってご参加下さい。

新年度に向けご多忙の時期かと思いますが、皆様どうぞ良き春をお迎えになりますようお願い申し上げます。(YK)

### J-ABA ニュース編集部よりお願い

● ニュースレターに掲載する様々な記事を、会員の皆様から募集しています。書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内、ギャグやジョーク、その他まじめな討論など、行動分析学研究にはもったいなくて載せられない記事を期待します。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて、下記のニュースレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については、編集部において決定します。

● ニュースレターに掲載された記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブサイトで開催します。

● 記事を投稿される場合は、公開を前提に、個人情報等の取扱に、十分ご注意ください。

〒582-8582 大阪府柏原市旭が丘4-698-1  
大阪教育大学 大河内研究室気付  
日本行動分析学会ニュースレター編集部  
大河内 浩人  
E-mail: okouchi@cc.osaka-kyoiku.ac.jp